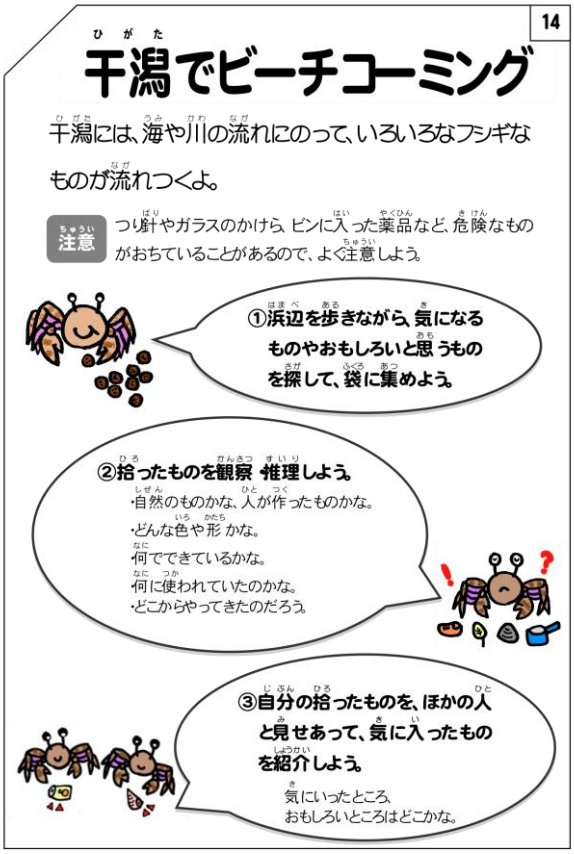
干潟でビーチコーミング

1. ねらい

・漂着物の観察から、海（干潟）と川のつながりに気づいてもらう。
・人の暮らしと海の関わり（分解しにくい石油製品が使い捨てにされてゴミとして堆積し、海の生きものや環境に影響を与えること等）に気づくきっかけを提供する。
・漂着物の観察から、想像や発見の楽しさに気づいてもらう。それを他の人と共有することによって、発見の幅が広がること、価値観がそれぞれ異なることに気づいてもらう。



参　考　この活動は、生きもの以外の人工物や周辺環境、人の暮らしとのつながりに目を向けてもらうきっかけとなる。また、清掃活動を実践するきっかけにもなる。
貝殻や魚の骨等は、そこにすむ生きものを知る手がかりになる。
漂着物の鑑賞、流木や貝を使った作品づくり等、工作やアートに発展することもできる。
以上のように、幅広いテーマを扱うことが可能なので、ねらいの設定をよく考えて行う。

2. 概要

○所要時間	40 分
○時　　期	通年
○場　　所	漂着物が流れ着く浜
○対　　象	小学校低学年以上
○人　　数	基本的に問わないが、人数が多いときは班にわかれて活動する。
○資　　材	レジ袋等の袋、市町村指定のゴミ袋（清掃作業用）、軍手
○事前･事後学習	拾ったものの種類や素材を調べる。なぜ海に漂着物があるのか考える。漂着物による、生きものや環境への影響としてどのようなものがあるか調べる。活動した海辺と身近な地域の河川のつながりを調べる。
○応　　用	各自が拾ったものを持ち帰って陳列する。オブジェ等の作品を作る。
○安全管理	ガラスの破片や注射器等の危険物が落ちている可能性があるので、注意を呼びかける。また、活動範囲以外の場所には行かないように伝える。その他、干潟で活動するときの一般的な注意事項を参照。潮汐の時間を把握しておく。

3. 実施の手順

※この活動の後に清掃活動や作品づくりを行う場合は、その分の時間を見込む。

導　入(5 分)

・海には色々なもの(自然物、人工物)が流れ着くことを伝え、おもしろいと思うもの、気になるものを拾いながら歩こう、と参加者に投げかける。ねらいによってはテーマを設ける。
・危険生物や危険箇所等の注意事項、活動範囲と集合場所と時間を伝える。

展　開(20 分)

・各自、あるいは各班で自由に歩きながら漂着物を探してもらう。

まとめ(15 分)

・集合したら、「どんなものを拾ったか」、「どんなところが気に入った(気になった)か」、「おもしろいと思うところ」について一人ずつ発表してもらう。20 名以上で行うときは、5〜10 名程度の班に分かれ、それぞれの班で輪になって行う。
・指導者は、拾ったものについて、「これはなんだろう？」、「何で出来ているのかな？」、「何に使うものなのかな？」、「どこから来たのかな？」等の問いを投げかけ、気づきを促す。
・拾った漂着物から以下のような気づきにつなげる。
①川の上流の木の実等の自然物や野外に捨てられたゴミの一部は、川を通じて海にたどり着くこと。
②石油製品等の人工物は軽くて分解されにくいため、海でゴミとなり漂いやすいこと。
③人工物が生きものの体に巻きついたり、誤って食べてしまった生きものに被害を与えること。
④海は、私たちの暮らしとつながっていて、その影響があらわれやすいこと。
⑤人それぞれに、価値観や着眼点が異なり、興味の対象や面白いと思うものが違うこと。

4. 指導のポイント

・参加者の感性を大切に

拾うものは、特にテーマを設定しない場合、人工物であっても自然物であっても、どのようなものでもかまわない。「気に入ったもの」という条件からそれていない限り、各参加者の感性を大切にする。

・発見する楽しさ、考えるおもしろさを感じてもらう

漂着物集めは、拾ったものから想像を膨らませて楽しむこともできる。指導者は、その漂着物がどのようにしてそこにたどり着いたのか架空の物語を考えてもらい、参加者の想像力をかきたてることができる。

・拾った漂着物を考察し、環境問題として着目する

環境問題として漂着物に着目してもらうときは、なぜそこに漂着物があるのか、どのようなものが多いのか、何か問題は起きていないのか等、背景を探り考察を促す投げかけをする。

・“ゴミ”は持ち帰る

ゴミになる人工物は持ち帰る。持ち帰れない場合は、事前に管理関係者と回収について調整し処分してもらう。